

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和7年度 岩手県意見交換会（第1回）議事概要

令和7年6月6日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和7年6月6日（金）15:00～17:00

【場 所】マリオス（盛岡地域交流センター）会議室

【出席者】（順不同・敬称略）

＜副代表団体＞ （順不同）

株式会社岩手銀行／岩手県／国立大学法人岩手大学／

特定非営利活動法人 いわて連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 岩手復興局

＜事務局＞

株式会社 JTB コミュニケーションデザイン/株式会社 makes

【議事概要】

1 開会

復興庁本庁より、参事官の出席ができないこと、新しい東北関連事業の取組総括の年であることを含めた挨拶がなされた。

2 昨年度の振り返り

昨年度の取組を3県でまとめている動画の視聴を中心に、振り返りを行った。各地域の課題に基づき、実践の場での解決に取組んだ。万博に向けて東北地域への訪問を促す招待状を作成した。この招待状は、岩手県では岩手大学や各高校の生徒と協力して制作され、結果として大阪関西万博復興庁テーマウィーク（5/19-24）でパネル展示が行われ、約5万人の来場者を迎えることができた。

3 各団体の活動紹介

復興庁、岩手銀行、岩手県、岩手大学、いわて連携復興センターより、取組紹介資料（資料1～資料5）を基に取組を紹介した。

4 令和7年度の取組方針、取組内容等について

〈取組方針・内容について〉

復興庁より、東日本大震災からの復興事業は、令和8年度以降は予算が縮小される見込みであることの説明がなされた。事務局より取組内容の説明がなされた。説明は以下のとおりである。岩手県は能登、宮城県は東南海地域の若者を連れていき地元の方との交流を図る実践の場を作る。また、第2期復興・創生期間（令和3年度～令和7年度）における取組を中心に、他地域の参考となる官民等の連携による取組事例の抽出を行い、能登周辺での3県合同セミナーを開催することとしたい。3県合同セミナーのスケジュールに関しては2025年12月13:30-16:00（開場13:00）を予定。場所は能登空港で1部は官民連携の知見を未来へと題し、3県での取組を発表し、動画をお披露目する。さらに、復興の知見を整理し、アーカイブ化し全国での共有・活用方法を紹介。実践の場で活動した高校生・大学生からの発表も行い、次世代へつなぐ取組として展開する。第2部はあの時の私に伝えたいこととし3県で実施したイベントの映像をまとめ、震災後の歩みや未来へのメッセージを収録する。岩手県として、取組の目的は、震災当時に学生だった20～30代の方々が、今だからこそ伝えられ

る想いや学びを記録し、震災の経験を風化させず次世代へ知見をつなぐこと。内陸部の高校生や大学生が沿岸部の復興の現場を知り、地域の未来について考える機会を創出する。取材の流れは、まずオリエンテーションで震災当時の岩手県沿岸部の被害や復興の歩みを学び、取材対象者の職業や復興への関わりを事前に調査する。次に、現地取材を行い、沿岸部で働く 20～30 代の方々にインタビューを実施し、震災当時の経験や復興への関わり、当時の自分に伝えたいことを聞く。最後に、ワークショップを通じて取材内容を整理し、次世代に伝えるコンテンツを動画作成する。

イベントでは、学生たちが取材をまとめた映像や記事を地域フォーラムで発表し、地域住民や他の学生と意見を交わし、震災の記憶を未来へつなぐ。期待される成果としては、震災当時の若者がどのように復興に関わり、何を感じてきたのかを次世代に伝える機会を創出し、内陸部の学生と沿岸部の若者との交流を促進し、地域のつながりを強化することが挙げられる。また、映像や記事をアーカイブ化し、防災・復興教育に活用することも目指している。

このイベントは、震災の教訓を「人の言葉」として次世代に継承し、未来の地域づくりに活かすことを目的としている。

〈本年度企画に関する意見交換〉

- ・取材対象者について、発信力のある方だけでなく、福島で原発被害に遭い、避難生活を送った方、津波の被害は直接受けていないが避難指示エリアにいたので逃げなければならなかった方や、ご自宅がなくなってしまった方、家は大丈夫であったが家族とともに避難した方で直ぐに避難したので当時の記憶があまりない方もいる。当時の記憶に蓋をしている方や、私の当時の記憶なんてと思う方や、前を向いているから振り返ることをさせないでという方もいる。そういう話すことを生業としているガイドさんではなく、生活者としての若者が対象となり、そういう方に体験を話していただけるのであれば、意義のあるものになると思う。

- ・沿岸部の高校生が震災当時に高校生だった沿岸部の若者を取材して、自分ごととして当時の様子や復興への関り方から教訓をまとめるというストーリーであればイメージがわく。しかし内陸の高校生が沿岸部の方の当時の取材をしたとして、どの程度教訓をまとめられるのか心配に思う。沿岸部の若者に取材すること自体に意味があることは、3 県合同セミナーにおいて能登の方々に中途半端にしか伝えられないのではないかと心配に思う。能登の方々に何を伝えることができるのか、具体的イメージができないでいる。

- ・協議会がありワークショップがあるということを知ってもらだけでも能登の学生にとって非常に意義はあるのではないかと。受け手側にとってワークショップの内容が響かないかもしれないが、しっかりとしたストーリーがあって、完璧なものをつくりあげることもちろんだが、発表を行いキーワードひとつでも持って帰ってもらえれば協議会としての意義はあるのではないかと。

- ・参加者について、大学生については引き続き岩手大学様に協力いただく。参加者の規模については 10 人から 15 人程度。ここに能登の学生も加わるイメージで調整している。能登の学生については、能登官民連携復興センターと調整している。などが話し合われた。

5 閉会

取材対象者や参加者の集め方を再確認し、メールベースで報告しながらワークショップまでに副代表団体と連携をとりながら進めていく。

以上をもって第 1 回意見交換会を終了する。